

株式会社 アルバック

2020 年度上期 決算説明会（2021 年 2 月 15 日開催）

およびアナリストミーティングの主な質疑応答（サマリー）

【上期実績・通期予想】

① 具体的にどのような受注案件が 3Q から 2Q に前倒しになったのか？上振れた分、通期受注高を修正しないのか？

A： FPD 関連では、中国の大型 TV 用 LCD の工場投資の後半部分約 50 億円等を含む 60～70 億円程度、半導体電子では、オプトデバイス関連の投資約 30 億円、合計約 100 億円程度が前倒しとなった。上期受注高の増加要因は前倒しの影響が大きく、今回、特に通期の受注予想を変更していない。

② 上期売上高が当初予想を上回る中、通期も上回るのではないかと？

A： 今回、通期売上高予想の修正は行わないが、上期に上振れした 50～60 億円程度の上振れ可能性はある。

③ 通期業績予想から上期営業利益(率)58 億円(7.0%)を差引すると、下期営業利益(率)は 92 億(11.3%)と大幅増加することになるが、達成可能か？ 2Q は営業利益率が 10%を超えたが、下期も 10%を上回る水準を確保できるのか？

A： 上期比・下期営業利益(率)は改善する見込み(上期比+34 億円)。
 下期は上期比、売上増加、ミックス改善、利益率改善努力の 3 つの要因で改善を見込んでいる。
 (a)売上の上振れ 50～60 億円程度(上期比+40 億円程度)
 (b)ミックス改善(上期比)
 利益率が高い半導体電子売上高約 90 億円、コンポーネント売上高約 15 億円増加、
 利益率が相対的に低めの FPD 売上高約 60 億円減少等によるミックス改善
 (c)生産性改善による利益率改善努力
 を見込んでいる
 売上増もある程度織り込んだ上ではあるが、営業利益 150 億円を達成したいと考えている。

④ 下期の 3Q・4Q の受注・売上・利益の傾向はどのようになりそうかと？

A： 3Q に予定していた受注・売上が前倒しになったこともあり、3Q の受注・売上・営業利益は低めになると予想している。

⑤ 上期の FPD および半導体電子部品の受注高・売上高の用途別内訳は？

A： 別紙のとおり。

⑥ 上期の営業利益率の品目別の順位は？

A： 別紙のとおり。

⑦ 品目別の営業利益率の順位について、コンポーネントが下がり、一般産業が上がっているがその要因は？

A：今回はコンポーネントの売上減少など売上水準の影響が大きい。

【半導体電子】

⑧ 半導体電子の2Q増加要因は？今後の投資動向は？

A：半導体については、2Qにロジックのメタルハードマスク工程向け装置やDRAM・NAND向け装置に加え、PCRAMの量産開発機の投資などがあり、受注が増加した。韓国メーカーを中心にメモリ投資再開・積極投資の動きがみられ、ロジック投資もファウンダリー2社を中心に積極的な投資が計画されており、中長期的に投資が拡大・継続すると見ている。

電子については、3Qから前倒しのあったオプトデバイス関連に加え、パワーデバイスや通信デバイス等の投資が日本・中国を中心に活発化したことにより、2Q受注が増加した。特に中国では、各種電子デバイスの国産化投資の動きが全国各地で活発化しており、部長級のエンジニア複数名が11月頃から技術営業を本格化したことで受注・引き合いが増加した。

中国では、昨年11月に、5Gやデータセンターなどの通信ネットワークやEVなどエネルギーネットワークなどへの大規模な投資計画を発表している。今年1月29日にも「電子部品産業の発展行動計画」を公表し、国産化方針を改めて示しており、地方政府による誘致・金融支援等もさらに活発化し、各種電子デバイス関連の積極的な投資が継続すると見ている。

⑨ 今後のロジック受注動向は？

A：ファウンダリー大手2社がEUVを活用した最先端の微細化工程投資を積極化している。今後のロジック・ファウンダリーの設備投資の7割以上がEUV関連となる見込みで、EUVで微細化が可能となったパターンを維持するために必要なメタルハードマスク工程で確実に受注できる。今後、更に微細化が進むとメタルハードマスク工程（装置台数）が1.7倍程度に増える見込みで、来年度以降、倍増させていきたい。

⑩ 半導体の市場環境は良くなってきていると思うが、今後、どのように伸ばすのか？

A：5G・スマート社会の進展に伴い、加速度的にデータ量が増加しており、メモリ・ロジック需要拡大の継続が見込まれる中、市場の伸びを取り込むとともに、新たな工程参入によるシェアアップも図っていく。

メモリの投資再開・積極投資に伴う、既存工程での受注増に加えて、ロジックのメタルハードマスク工程で高い評価をもらったことや1社購買を嫌いセカンドベンダーとしてのアルバックに対する期待が高まっていることなどから、ロジックやDRAM等における共同開発案件も増加しており、性能・技術で競合比優位性を出し、新規工程でシェアアップを図っていく。

⑪ PCRAMの投資動向は？

A：最先端を走る米国ロジックメーカーが活用事例の広がりが高評価である旨積極的に紹介をしており、まだ投資時期をはっきりとつかめているわけではないが、来年度以降の投資を期待している。他のメモリメーカー各社もアルバックのスパッタリング装置を使って量産開発に着手しており、すそ野が広がっている。

⑫ エレクトロニクス関連の投資動向は？具体的にどのような投資が多いのか？どのような装置ラインナップになっているのか？

A：パワーデバイスは、日本での投資は IGBT 中心であり、最近活発化してきた中国では SiC 向け商談が中心である。中国のパワーデバイスメーカーは、まずは家電向け等ローエンドからスタートし、ミドル・ハイエンドを狙っていく方針で、来年度から量産化・新工場建設が増加する見込み。オプトデバイスは、AR/VR 用 μ OLED や生体認証、車載用ディスプレイなど幅広い分野で投資が活発化している。
エレクトロニクス関連では、スパッタリング装置やエッチング装置、アッシング装置、CVD、イオン注入装置等を提供している。

⑬ 中国は装置の国産化も進めるのではないかと？中国装置メーカーの実力は？脅威にはならないか？

A：既に中国の装置メーカーの中にはほぼ全ての装置を作っている会社もある。中国装置メーカーのデモ機の評価期間中の費用を政府が補填するなど、装置の性能アップに国とデバイスメーカーが協力する体制ができており、電子関連の装置は 3～5 年でキャッチアップしてくる可能性がある。
現時点で最先端の電子デバイスは 2 世代くらい遅れており、当面は海外から装置を買わざるを得ないが、中長期的には脅威となり得る。油断せず、絶えず技術的に 1 歩 2 歩先を行くことで優位性を維持していきたい。

【FPD】

⑭ FPD の市場見通しと中長期の売上見込みについて教えてほしい

A：LCD から OLED に移行していく流れに変わりはなく、今後の投資の中心は OLED になる。スマートフォン用中小型 OLED 投資は中国を中心に今後も継続する。OLED パネルはスマートフォンに加え、タブレットや医療用・ゲーム用モニター、TV などにも広がる見込みで大型基板の OLED の量産開発への取組も本格化している。バックプレーン用のスパッタリング装置や蒸着装置等で引き続き貢献していく。
また、新型コロナウイルスに伴う巣ごもり需要で LCD パネルの需要も増加しており、投資継続の動きもみられる。過去のように FPD 売上高が 1,000～1,200 億円に戻るのには当面は難しく、500～700 億円程度の売り上げ規模になると考えている。

⑮ LCD パネル価格が上昇している中、投資動向はどうか？

A：新型コロナウイルスに伴う巣ごもり需要もあり、パソコンや大型 TV、ゲーム用・医療用・高グラフィック用などモニター用高画質 LCD パネル需要が増加し、中国では既存工場の追加投資も継続している。
昨年 8 月時点では、LCD 投資はひと段落するとみていたが、韓国メーカーの工場閉鎖方針が出ている中で足元のパネル需要が活発化していることを背景に、中国国内メーカー同士のシェア確保のための投資競争が過熱化しており、新たに大型基板の LCD 工場建設の動きもある。

⑯ 中小型 OLED 向けスパッタリング装置の受注状況・競争状況について教えてほしい。

A：OLED の高精細化要請が強まり、当社の技術が再評価され、バックプレーン用スパッタリング装置のシェアが高まってきている。引き続き競争環境は厳しいが、低パーティクルなど技術を磨きシェアを確保していきたい。

⑰ 大型 OLED の取組状況は？

A： OLED パネルはスマートフォンに加え、タブレットや医療用・ゲーム用モニター、TV などにも広がる見込みで、大型基板の OLED の量産開発への取組が本格化してきており、来年度以降、投資が活発化してくると期待している。当社の大型装置での強みを活かして、バックプレーン用のスパッタリング装置等で引き続き貢献していく。

⑱ ロール・ツー・ロール（巻取り型成膜装置）のフィルムキャパシタやバッテリーでのビジネス展開について教えてほしい。

A： これまでタッチパネルや光学膜用に巻取り型成膜装置を提供しており、最近ハイブリット車のフィルムキャパシタ用で年間 10~15 億くらいのビジネスとなっている。

次世代型リチウムイオン電池は、電池容量(エネルギー密度)と安全性向上のため、構成部材の改善改良が行われる中、「負極」の素材として「金属リチウム」に注目が集まり、当社の真空蒸着技術と巻取り型成膜技術への期待が高まっており、大手電池メーカーと協力して装置開発に取り組んでいる。

2025 年の市場投入に向け、23 年頃から投資が拡大しはじめると考えている。

【コンポーネント】

⑲ コンポーネントの 2Q 回復の要因は？ 下期以降はどうか？ OLED 用クライオポンプのシェアは？

A： 1Q は、自動車関連の設備投資延期や FPD 関連のクライオポンプ案件が少なかったことなどから、コンポーネントの受注は低水準だったが、2Q は半導体電子関連の設備投資回復に伴う真空ポンプなどで受注が増加した。

下期には OLED 関連のクライオポンプの大口案件を予定しており、受注増加を見込む。

OLED 用のクライオポンプでは防振性等を高く評価いただきほぼ 100%のシェアとなっている。

【中期経営計画の進捗】

⑳ 中期経営計画を発表してから半年が経ったが、進捗状況は？ モノづくり改革による利益率改善の取組みの成果・進捗は？

A： 中期経営計画では、「成長に向けた開発投資（半導体・電子の成長）」と「体質転換による利益重視の経営」を掲げ、経営改革に取り組んでいる。

半導体は、ロジックの最先端プロセスであるメタルハードマスク工程に参入できたことで、ロジックの他工程や DRAM 等の新規工程の共同開発の声掛けをもらえるようになり、顧客のロードマップを共有し、中長期的な成長のための開発に取り組むことができるようになった。

共同開発なので少し時間がかかるが、中期経営計画期間中に順次成果を見せられる。

電子は、日本の電子部品関連の投資に加え、国産化に大きく舵を切った中国のパワーデバイスやオプトデバイス、通信デバイス、センサー等の旺盛な投資の動きにいち早く対応し、成果に結びつき始めている。

具体的には、①部長級のエンジニアによる中国での広範な技術営業、②中国トップクラスの研究所と連携、③現地営業サポート体制の強化などに取り組み、成果に結びついてきている。

また、半導体電子分野強化のため、顧客の近くで開発するグローバル開発体制も構築し、研究所の統合により経営資源の配分もフレキシブルに行っている。

モノづくり改革による生産性改善・利益率改善については、装置コストの 8 割は設計段階で決まってしまうという再認識のもと、技術図面の完成度向上など技術設計の改革により、リードタイムの短縮や調達コストダウンに設計段階から取り組むこととした。製品毎に順次着手している。

調達面では、グローバルに調達体制を一本化し、効率化とコストダウンに取り組んでいる。

また、装置製造拠点の専門性を高め、集中することで生産性向上・リードタイム圧縮にも取り組んでいる。

モノづくり改革の効果は地道な改善の積み重ねで、なかなか一気に成果には結び付きにくいですが、着実に改善につながってきている。

特に FPD は、電子の好事例を参考に、利益率改善に昨年度から取り組み始めていたこともあり、主力の標準機種を中心にリードタイム短縮やグローバルな調達体制の一本化が着実に進み、一定の成果につながり始めている。

他のビジネスユニットも取り組みを開始しており、順次成果につなげていく。

経営改革をやりとげ、成長を実現し、企業価値向上を目指していく。

以上

〈別紙〉

品目別実績 内訳割合・営業利益率順位

●受注高 品目別の内訳割合

受注高	FY2020 1H
半導体電子（億円）	279
・メモリ	3割弱
・ロジック	1割強
・電子部品	3割半ば
・パワー半導体	2割弱
・実装	1割弱
FPD（億円）	233
・LCD	5割強
（大型向け割合）	（ほぼ大型向け）
・OLED	4割強
・その他	1桁台半ば

●売上高 品目別の内訳割合

売上高	FY2020 1H
半導体電子（億円）	226
・メモリ	4割弱
・ロジック	1割弱
・電子部品	3割強
・パワー半導体	1割半ば
・実装	1割弱
FPD（億円）	245
・LCD	3割強
（大型向け割合）	（大型向け8割強）
・OLED	約5割
・その他	2割弱

●営業利益率順位 2020年度1H実績

順位	品目
1	半導体電子
2	一般産業
3	その他
4	FPD
5	コンポーネント
6	材料

全社平均利益率は
2)一般産業と3) その他との間